

## 気象台記念公園の由来について

昭和九（一九三四）年に大きな被害をもたらした室戸台風を契機に、気象通信網の必要性が唱えられ、昭和十三（一九三八）年中央気象台布佐出張所（気象送信所）がここに設置されました。この場所が選定された理由として、当時の中央気象台長であった布佐出身の岡田武松の存在が挙げられます。

岡田武松は「台風」の名付け親とも言われ、気象観測の第一人者として「気象学の父」とも呼ばれており、生涯にわたり気象学において多大な功績を残しています。気象送信所の設立は、周りに高い建物などがなく、観測に適していた台地であったため、武松は布佐町と交渉し、布佐町が土地を寄付したことから実現しました。

気象送信所では、高層気象観測として、無線機をつけた風船「ラジオゾンデ」を毎日飛ばしていました。現在、「ラジオゾンデ」による高層気象観測は、世界各地で毎日決まった時刻に行われており、日本では、全国十六か所の気象官署などで実施されています。

衛星通信の発達に伴い、気象送信所はその役割を終え、平成十一（一九九九年）に廃止となりましたが、その広大な敷地と武松の気象への思いは、我孫子市に引き継がれ、人々に親しまれる場所として、平成十三（二〇〇二年）に「気象台記念公園」と名付けられ、整備されました。

令和四（二〇二二）年 我孫子市役所



岡田 武松



気象送信所（我孫子市教育委員会蔵）